

# より働きやすい環境を目指して

かご  
＼ロボ／ 2025

令和7年度 鹿児島県介護生産性向上総合相談センター

【施設名】 特別養護老人ホーム ルーピンの里

# かご ＼ロボ／ 2025

## 1. 施設の概要

## ■ 基本情報

- 運営法人: 社会福祉法人 福寿会
- 所在地: 〒893-1612 鹿児島県肝属郡東串良町池之原2077番地1
- サービス種別: 介護老人福祉施設
- 定員: 合計60名（入所50名 / ショートステイ10名）平均介護度: 4.0

## ■ 基本理念「人」として

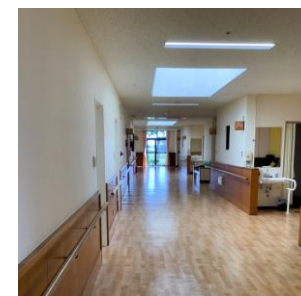
「人はひとりでは生きていけない。人は支えたり支え合ったりして生きていくものである。そこに福祉の原点を見ることができる」

## ■ 施設の特徴

- 豊かな自然環境: 大隅半島東部に位置し、温暖な気候と自然に囲まれた穏やかな環境が特徴。
- 目指すケア: 町花であるルーピンの花言葉「あなたは私の心に安らぎを与えてくれました」を体現する、一人ひとりに応じたケアを心がけています。
- 専門性の追求: 社会福祉の専門家として、地域に根差した行動を実践。

## ■ 利用者・居室状況

- 利用者内訳: 男性14名、女性36名 平均年齢84.8歳（男性）、89.4歳（女性）
- 居室構成: 多床室（4人部屋）：11室、従来型個室：6室

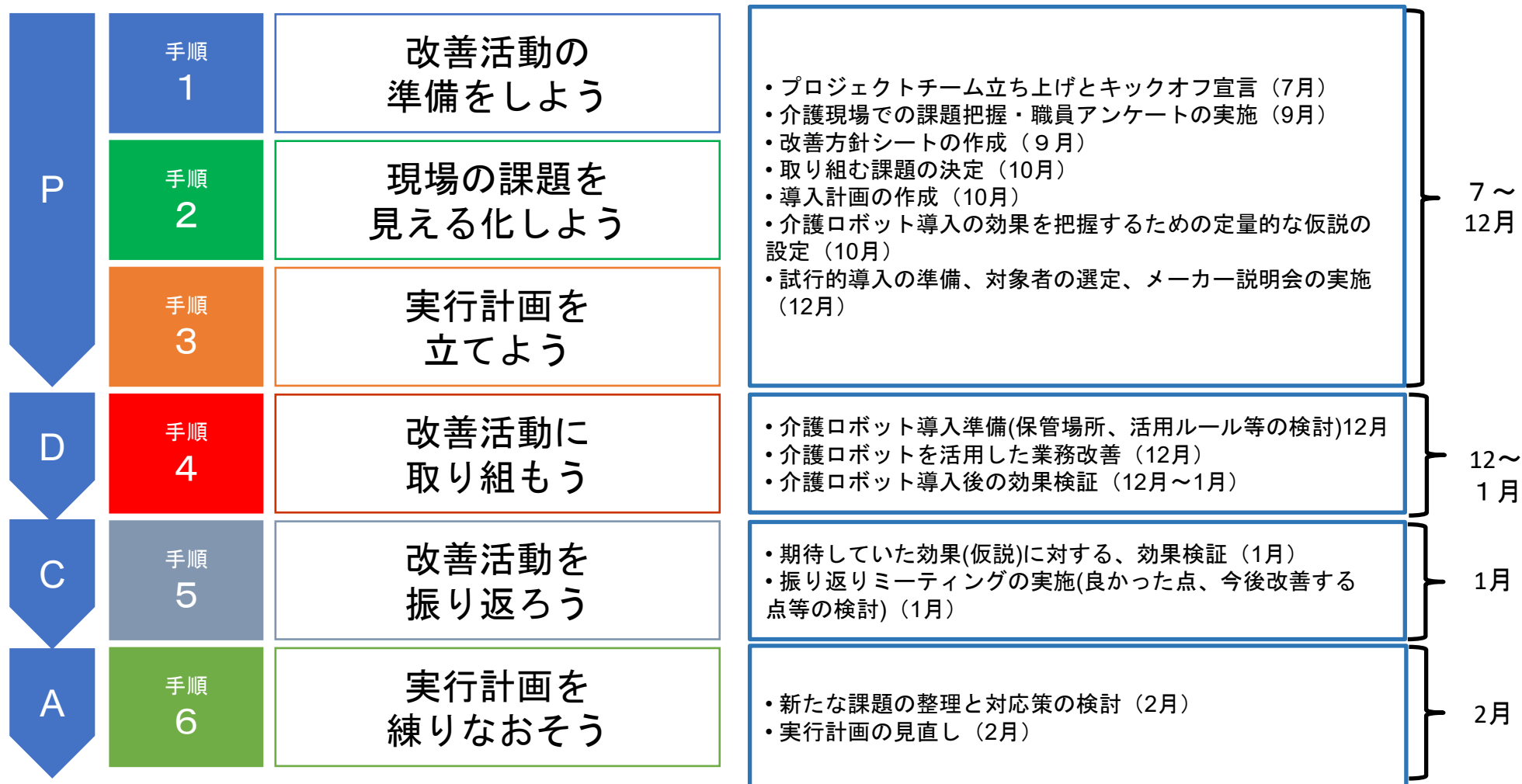


# かご ＼ロボ／ 2025

## 2. 取り組みの流れ

## パッケージモデル

## プロジェクトの流れ



## パッケージモデル

P	手順 1	改善活動の 準備をしよう
	手順 2	現場の課題を 見える化しよう
	手順 3	実行計画を 立てよう
D	手順 4	改善活動に 取り組もう
C	手順 5	改善活動を 振り返ろう
A	手順 6	実行計画を 練りなおそう

## 推進体制の構築（2025年7月9日始動）

プロジェクトの円滑な進行と責任の明確化のため、多職種による専門チームを編成。

### ■ プロジェクトチームの構成

- プロジェクトリーダー: 介護福祉士
- 報告書担当: 介護主任
- マニュアル担当: 介護課長
- 調査担当: 介護福祉士
- 研修担当: 介護副主任（介護福祉士）
- その他: 管理栄養士



ブレインストーミングの様子(9月3日)

### ■ 組織としての意思決定

- キックオフ宣言: 2025年7月9日、施設長より全職員へプロジェクトの開始を宣言。
- 目的の共有: 施設全体で取り組むべき重要課題であることを明確にし、推進力を高めた。



# 手順2 現場の課題を見える化しよう (2/2)

	課題 1)	課題 2)	課題 3)	課題 4)
改善する課題	・チームワークがとれていない	・職員間の伝達、コミュニケーションが取れておらず、自己流のケアを行う人がいる。	・職員の身体的負担 ・抱える介護をしなければならない環境	・休憩場所が少ない
課題分析 ※改善する課題の分析 (何が原因となっているのか検証する)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・チームワークがとれていない協力体制ができていない。</li> <li>・コミュニケーション不足</li> <li>→情報伝達不足が多い(欠勤者等に伝わっていない)</li> <li>・それぞれの部署内での話し合いが十分でない。</li> <li>→なぜ?</li> <li>・業務の依頼が多すぎる。</li> <li>→いつ・どこで・誰が・どのように</li> <li>→業務内容の把握(タイムスタディ調査等)</li> <li>看護から介護への依頼</li> <li>依頼に気を遣う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・記録(申し送り)を見ていない。</li> <li>→介護記録ソフト(申し送り確認機能)組織の課題</li> <li>ほのぼのを利用</li> <li>申し送り→ほのぼのの記録をまとめて出力</li> <li>・自ら情報を取りに行かず、収集する姿勢が無い。</li> <li>→(教育体制)組織・個人の課題</li> <li>・コミュニケーションが取れていない件に関しては、どうしても手や足を止めないといけない状況を作らないといけない為、そこまで余裕が無いのでは。</li> <li>→余裕が無い(何が時間を占有している?)</li> <li>・トランシーバー型のインカムを4月から運用中</li> <li>→伝達方法(個別、全員)の使い分けができない?</li> <li>→本体のスピーカーから音が漏れてしまう(プライベートな会話に向かない)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・抱えなければならない業務</li> <li>・介護量が多い。</li> <li>・職員の能力がバラツキがある。</li> <li>・会議が長く、夜勤明けには負担がかかる。</li> <li>→いつ・どこで・誰が・どのように</li> <li>入浴場面(居室では天井走行式のリフト導入済み・トランスファーボードの活用もできている)</li> <li>・浴室で移乗介助(浴室への移乗機器の導入が進んでいない)。</li> <li>・特浴(ストレッチャータイプ)</li> <li>・ベッド→車椅子・ストレッチャー→浴室(ストレッチャー移乗)</li> <li>※女性職員のみでの重度者の移乗は困難→男性職員要請(要請職員の心理的・身体的負担も大きい)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・部屋が限られているため、他の休憩場所以外を使用している。</li> <li>→もう少し詳細を</li> <li>・休憩室に5、6人しか入れない(横になるスペースがない)</li> <li>→休まらない、車の中で休憩している職員がいる</li> <li>・整理整頓で休憩スペースの拡大が図れるか?</li> <li>30年前の施設・当時より職員も相当数増えている。</li> </ul>
改善活動案 ※課題の原因への改善案	<ul style="list-style-type: none"> <li>・部署内での意見をしっかりとまとめる。</li> <li>・月1回話し合いの場を設ける。</li> <li>→業務内容の洗い出し(タイムスタディ調査?)</li> <li>スマートフォンのOS(android・ios)の確認。</li> <li>管理職からキックオフ宣言</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・申し送り、グループLINE、ホワイトボードの活用をより徹底する。</li> <li>・インカムを使用し伝達、コミュニケーションを取る。</li> <li>→インカムの活用(lineラジャー:ジャブラ・アンビエ・モンス)</li> <li>・情報伝達の問題で個人の問題と施設側の問題の両面から原因を整理してみる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・環境・介護機器の導入</li> <li>・職員の能力アップ→具体的に</li> <li>・リモート会議の推進</li> <li>・書面での伝達</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・休憩場所を固定する</li> <li>・休憩場所、取り方に関する職員アンケートの実施</li> </ul>
実施する改善活動 ※改善案の具体的な活動計画	<ul style="list-style-type: none"> <li>・タイムスタディ調査を実施する。</li> <li>○介護課:10名 android:1名 iPhone:9名</li> <li>○看護課:7名 android:4名 iPhone:3名</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・インカムについて、仕様上イヤホン利用はできない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入浴介助の負担軽減に向けた移乗支援機器「サスケ」をレンタルして導入を検討する。</li> </ul>	
課題解決の取り組み優先度 (1~3または4)	1	3	2	4
課題の難易度 (3難・2普・1易)	2	2	2	3

### チームワークの向上と情報共有の強化

現場の課題に対し、主観的な「実感」と客観的な「データ」の両面からアプローチ。

#### 1. タイムスタディ：業務の「見える化」実施

- 背景: 誰が、どの業務に、どれだけの時間を費やしているかが不明確で、具体的な改善ポイントが絞り込めない状態。
- 目的: 1日の業務の流れを数値化（見える化）し、無駄や負担が集中しているポイントを特定。

#### 2. 職員アンケート：現状の意識把握

- 仕事の進め方や、現在の協力体制への満足度を調査。

#### 3. 情報共有の徹底：目的の浸透

- 「なぜこの調査を行うのか」という目的（改善に向けた活用方法）を職員間で共有し、前向きな協力を促した。

## 問題解決の道筋シート:業務の見える化

深堀原因	最新の対応方法が共有されず、旧来の手法や個人の独自判断で業務が行われている	ことに対し
業務改善の取り組み	業務内容の「見える化」を	実施することで
好転換された深堀原因	それぞれの業務内容、業務の流れを客観的に	確認することができ
原因	コミュニケーション不足による	情報共有不足が解消され
結果	職員間での情報が共有	されて
悪影響	最新の対応方法で統一された業務が	行えるよう期待できる。

## タイムスタディ実施における技術的課題と現場環境

実態調査を正確に行うため、以下の「端末」と「通信環境」の問題を事前に整理・把握。

### 1. デバイス（端末）の互換性問題

- **専用アプリの制約:** タイムスタディに使用するアプリ「FonLog」が、Android端末にしか対応していなかった。
- **職員の所持状況:** 職員の私物端末を確認したところ、その大半がiPhoneであることが判明し、そのままでは調査が実施できない状況。

### 2. 施設内の通信インフラ（ネットワーク）問題

- **不安定な接続:** 施設内のネットワーク環境にムラがあり、特に居室内や廊下の端などのエリアで通信が不安定。
- **業務への支障:** 通信が途切れてしまう箇所が多々あるため、リアルタイムでの正確な記録入力が困難という課題があった。

## タイムスタディ実施課題への解決策

技術的・環境的な障壁に対し、リソースの活用とタイミングの調整で対応。

### 1. 端末不足への対応（デバイス問題の解消）

- 外部リソースの活用: 「かごロボ」より、Android端末3台の貸与。
- 運用方法の工夫: 貸与された端末を職員間で交代しながら使用することで、iPhoneユーザーの職員も支障なく入力できる体制を整備。

### 2. 通信環境の改善と実施時期の調整（ネットワーク問題の解消）

- インフラ整備との連携: 施設内の改修工事に合わせてWi-Fiの増設工事が計画・実施中だったため、ネットワーク環境が安定する工事完了を待ってから調査を開始。

### 3. タイムスタディ調査の実施概要

正確な業務実態を把握するため、現場の勤務形態に合わせた柔軟な運用体制を構築。

#### 実施期間

- 期間: 2025年12月21日 ~ 2026年1月25日
- 対象日数: 職員一人につき、合計5日間のデータを収集。

## 問題解決の道筋シート：移乗介護における身体心理的負担の軽減

深堀原因	職員の身体的負担が大きく、人力で「抱える介護」をせざるを得ない環境	(こと) に対し
業務改善の取り組み	介護機器の導入を	実施することで
好転換された深堀原因	抱える介護の頻度が	減少することで
原因	入浴介助時の身体的・心理的負担が	軽減され
結果	職員の健康問題（腰痛）が	改善されて
悪影響	腰痛による離職や休職が	なくなることが期待できる。

## 業務負担（腰痛）に関する課題抽出と改善案

現場職員が直面している業務上の負荷の実態を調査し、具体的な解決策を検討。

### 1. 腰痛アンケートによる現状把握

- 職員を対象に、日々の業務の中でどの程度負担を感じているかの実態調査を実施。

### 2. 負担の大きい場面の特定

- 「課題の見える化」の結果、職員が最も身体的負担を強く感じている場面は「入浴介助時」であることが判明。



### かごロボとの対面ミーティング (2025年10月31日)

実態調査に基づき、導入する介護ロボットに求める「3つの必須条件」を明確化。

#### ■ 介護ロボットに求める具体的な要件

- **身体的負荷の解消:** 腰痛の予防および、日々の業務における身体的な負担を確実に軽減できること。
- **操作の簡便性:** 体格差に関わらず、女性職員一人でも安全かつ容易に扱えること。
- **環境適応性:** 最も負担の大きい場面である「浴室内」で支障なく使用できること。

#### ■ 改善に向けた具体的アプローチ

- **専門機関への相談:** 現場の課題解決に向け、「かごロボ」へ改善策を相談。
- **解決策の選定:** 相談の結果、入浴介助等の負担を軽減するため、移乗支援介護ロボット「SASUKE」の試行導入を検討。

### メーカーによる操作説明会の実施 (12月8日)

オンラインにて実際の機器操作を交えながら導入に向けた技術習得を実施。

#### ■ 実施内容

- **オンライン形式の指導:** 画面越しにメーカー担当者からオンラインで説明を受けつつ、手元の実機 (SASUKE) を実際に動かして操作感を確認。

#### ■ 出席者

- プロジェクトリーダー
- 介護副主任
- 介護課長

#### ■ 運営上の課題

- **参加人数の制約:** 勤務の都合上、他のプロジェクトメンバーは出席が叶わず、一部の主要メンバーのみでの受講。

### 試行的導入の準備 (2025年12月12日～19日)

機器の効果と安全性を正しく検証するため、「場面・対象者・担当者」を具体的に設定。

#### ■ 試用場面の設定

- 入浴介助に関連する移乗: 移動用ストレッチャーから、特殊浴槽用ストレッチャーへの移乗場面に限定して検証。

#### ■ 試用の対象者 (利用者様)

- 身体状況: 全身の筋力低下が著しく、寝たきりに近い状態の方。
- 移乗の困難度: 身体的特性により、特に女性職員だけでの移乗が困難な方。
- 同意: 試行的導入に協力が得られる方。

#### ■ 試用を担当する職員

- 業務内容: 実際に入浴介助の業務に従事する職員。
- 身体的条件: 小柄で筋力が強くないなど、より機器のサポートを必要とする職員。

## 試行的導入の実施 (2025年12月19日～27日)

限られた期間で安全かつ効果的に検証を行うため、マニュアルの整備と中心メンバーによる伝達体制を構築。

### ■ 施設用ミニマニュアルの作成

- 現場の状況に合わせ、職員が迷わず操作できるよう独自の「施設用ミニマニュアル」を整備。

### ■ 実施体制と技術の伝承

- 技術習得者の配置: メーカーから直接説明を受け、機器操作に習熟した職員をリーダーとして配置。
- 段階的な広がり: まずはプロジェクトの主要メンバーを中心に実施し、現場での確実な運用方法を確立。

## 移乗支援機器「SASUKE」 操作手順書マニュアル

### 1)事前準備

- ・「SASUKE」本体の確認: バッテリー残量、アーム等の動作確認 (異常は、ないか)
- ・環境の整備: 入浴場のストレッチャーをSASUKEがアプローチしやすい位置・高さに定める。周囲に接触しそうな障害物はないか。

### 2)スリングシートの装着

- ・利用者様の身体を左右に少し傾け、スリングシートを背中の下、奥深くまで差し込む。
- ・スリングシートの下端が膝下にくるよう、シワを伸ばしながら、シート全体を整える。
- ・膝下にクッションを入れる。
- ・上肢用のホルダを着用する。(黄色の日印箇所が、肘の位置にくるよう整え、スリングシートと上肢用のホルダをマジックテープで留め、上肢を固定・支える)

### 3)SASUKEのアプローチと固定

- ・SASUKEをリクライニングの横へ移動させる。
- ・利用者様に声をかけ、リクライニングの背もたれをゆっくり起こし、高さを合わせながら、SASUKE本体の棒をスリングシートの輪 (頭部側と足側) に入れる。
- ・

### 4)吊り上げ・移動

- ・SASUKE本体の緑色のボタンを長押し、片手モードへ切り替え、一番上まで上げる。(吊り上げる前には、必ず「少し体が浮きますよ」と声を掛け、機器に対する恐怖・不安などの精神的負担やこわばりを緩和する事が必要)
- ・足側と頭部側のアームを交互に持ちながら動かし、リクライニングの配置場所から移動。入浴場のストレッチャーの上へ移動。

### 5)入浴場のストレッチャーへ移乗

- ・SASUKE本体の緑色のボタンを長押し、両手モードへ切り替える。入浴場のストレッチャーへ利用者様の頭部や身体的位置を確認・調整しながら、ゆっくりと降ろしていく。
- ・SASUKE本体の棒をスリングシートの輪 (頭部側と足側) から抜いていく。
- ・上肢用のホルダースリングシートを外す。
- ・SASUKE本体を退避させ、入浴の支援に移ります。

### ※注意事項※

#### リクライニングの角度

- ・完全にフラットな状態から吊り上げようとする、首への負担が大きくなる為、頭部のギャッジを少し上げ、調整しながら、吊るしていく。

## 試行的導入中に生じた課題：環境的要因

苦労した点）実際の運用を通して、事前の計画段階では気づかなかった「現場の動線」と「機器の仕様」の不一致が明確化。

### ■ 活用場面の限定的な想定

- 当初は「特殊浴槽（特浴）介助」での活用に特化して検討していたため、試用場面を特浴ストレッチャー上のみに絞って計画していた。
- メーカーへの依頼内容も特浴ストレッチャーに合わせたキャスターサイズ等に限定。

### ■ 実際の活用動線との乖離

- 運用を開始した結果、利用者が特浴へ移動するまでには「居室内での介助」や「移動用ストレッチャーへの移乗」など、特浴以外での活用場面が不可欠であることが判明。
- 特浴内でのみの想定では、一連の入浴動作をトータルでサポートすることが困難であるという実態が浮き彫りに。

## 試行的導入時の課題点の見直し：環境的要因

工夫した点）「点」での活用計画から、入浴前後を含む「線」の活用へと見直し。

### ■ 活用場面の再定義

- **現場での再検討:** 特殊浴槽内だけの使用では不十分であるとの認識から、メンバー間で活用場面を改めて協議。

### ■ 新たに追加した活用場面

- **居室での移乗:** 利用者の居室から移動用ストレッチャーへ移乗する場面。
- **中継の移乗:** 脱衣所等で移動用ストレッチャーから特殊浴槽専用ストレッチャーへ移乗する場面。

## 試行的導入中に生じた課題：人的要因

苦労した点）推進体制の維持や業務負荷の認識に関する課題が明確化。

### ■ 兼務によるリソース不足

- メンバーそれぞれが通常業務に加え、同時に複数の役割を担っている中で、新たなプロジェクトが追加される形となった。
- 現場の既存業務と、新しい取組を両立させるための時間的・精神的な余裕が不足。

### ■ 取組への認識の甘さ

- プロジェクト開始当初、この取り組みを比較的安易に捉えてしまっていた側面があった。
- 実際に運用を開始してみると、マニュアルの習熟や課題の検証には多大な労力が必要であり、「片手間で取り組める内容ではない」ことを痛感。

### ■ 現場の実感

- 実行過程で、腰を据えて取り組まなければ真の成果は得られないという認識へと変化。

## 試行的導入時の課題：人的要因

工夫した点）一部のメンバーに限定されていた技術や知識をチーム全体へ波及させるため、以下の取り組みと現状の分析を実施。

### ■メンバー間の知識共有（レクチャーの実施）

- フォローアップ体制: メーカーのオンライン説明会に参加できなかったメンバーに対し、参加したメンバーによる使用方法のレクチャーを実施。
- ツールの活用: 独自に作成した「施設用ミニマニュアル」を用い、操作手順の標準化。

### ■習熟状況の現状分析

- 技術習熟の不足: レクチャーは実施したものの、試行的導入の期間内では、十分に時間をかけて技術を習熟するまでには至っていない。
- 課題の認識: 単なる操作説明だけでなく、実際の業務の中で使いこなすための継続的な練習と時間の確保が、今後の大きな課題として浮き彫りになった。

## パッケージモデル

P	手順 1	改善活動の 準備をしよう
	手順 2	現場の課題を 見える化しよう
	手順 3	実行計画を 立てよう
D	手順 4	改善活動に 取り組もう
C	手順 5	改善活動を 振り返ろう
A	手順 6	実行計画を 練りなおそう

### 改善活動の具体的実践：居室における移乗

実際の業務への組み込みを開始したところ、居室内のレイアウトによる設置困難という課題に直面し、運用の工夫で対応。

#### ■ 直面した課題：設置スペースの不足

- **物理的制約:** 利用者の居室において、ベッドとタンスの間に十分なスペースが確保できず。
- **活用の困難さ:** このスペースの狭さが原因で、「SASUKE」をベッドサイドへ適切に配置・活用することが困難。

#### ■ 現場での対応策（運用の工夫）

- **中継移乗の導入:** 直接ベッドからストレッチャーへ移すのではなく、一度リクライニング車椅子へ移乗させる工程を挿入。
- **回避策の構築:** 「ベッド → リクライニング車椅子 → ストレッチャー」という段階的な手順を踏むことで、狭い空間での移乗課題に対応。

### 改善活動の具体的実践（居室内）：ストレッチャー間の移乗課題

移動用ストレッチャーから特浴ストレッチャーへ移し替える際、機器同士の「足回り」の干渉という新たな問題が浮き彫りになった。

#### ■ 直面した課題：機器の構造的干渉

- **足回りの不一致:** 移動用ストレッチャーのキャスターと、SASUKEの足部分の間隔が重なった。
- **配置の制約:** この干渉により、SASUKEをストレッチャーに対して最適な位置まで寄せることができず、利用者をストレッチャーの定位置に降ろすことが困難。

#### ■ 現場での対応策

- **手動による位置調整:** SASUKEで移乗させた後、どうしても上下にズレが生じてしまうため、最終的には職員が手作業で利用者の位置を定位置へと修正。
- **運用の限界:** 身体的負担の軽減を目指したものの、最終的な位置微調整において、依然として職員の介助力が必要となる状況。

### 改善活動の具体的実践（浴室）：移乗とスペースの制約

最も腰痛リスクの高い場面である「浴室内」での活用を試みましたが、空間的な制約により、想定を上回る多段階の手順が必要となった。

#### ■ 直面した課題：浴室内のスペース不足

- **同時設置の困難:** 特浴室内において、移乗支援機器「SASUKE」とストレッチャーを、移乗に最適な位置に並べて配置することができなかった。
- **作業効率の低下:** スペースの制約を解消するために、機器やストレッチャーをその都度動かす必要が生じ、作業工程が大幅に増加。

#### ■ 現場での対応策（多段階の移乗手順）

狭い空間で安全を確保するため、以下の6ステップによる複雑な運用で対応。

1. **特浴用ストレッチャーの退避:** 通路確保のため、特浴用ストレッチャーを一度邪魔にならない場所へ移動。
2. **吊り上げ:** 移動用ストレッチャーから、SASUKEを用いて利用者を持ち上げる。
3. **移動用ストレッチャーの退避:** 空いたスペースを作るため、移動用ストレッチャーを移動。
4. **降ろしの実施:** 空いたスペースに特浴用ストレッチャーを戻し、利用者を降ろす。
5. **SASUKEの退避:** 入浴の邪魔にならないよう、SASUKEを浴室外や端へ移動。
6. **入浴介助開始:** ここまでの工程を経て、ようやく本来の入浴支援を開始。

## ■ 苦勞した点：チーム内における習熟度の格差

- **協議体制の制約**: シフト制の勤務環境下ではメンバー全員が集まる検討会の実施が難しく、一部のメンバーのみで協議した内容を後から伝達する形式となった。
- **理解度のバラつき**: 伝達による情報共有では限界があり、メンバー間での機器操作に対する理解度や技術的な習熟度に大きな開きが生じた。

## ■ 工夫した点：現状分析に基づく「撤退」と「次なるPDCA」という決断

- **本格導入の見送り（断念）**: 今回の検証結果に基づき、現在の施設環境や運用体制では「SASUKE」を十分に活用しきれないと判断し、当施設への本格導入を断念。
- 『ノーリフトケア』についての勉強会を開催。改めて介護職員への周知、理解を図った。
- **代替手段の検討**: 単に導入を諦めるのではなく、現在の環境下で職員の負担を軽減できる他の手段（環境調整、スライディングシート、フレックスボード等の代用）についても併せて検討。
- **次なる計画への転換**: この経験を糧に、より自施設の動線やスペースに適合する「床走行リフト」の試行へと計画を練り直し、新たな一步を踏み出す。

## パッケージモデル

P	手順 1	改善活動の 準備をしよう
	手順 2	現場の課題を 見える化しよう
	手順 3	実行計画を 立てよう
D	手順 4	改善活動に 取り組もう
C	手順 5	改善活動を 振り返ろう
A	手順 6	実行計画を 練りなおそう

### 本格導入見送りの要因分析：環境要因

機器の性能ではなく、施設内の物理的環境（寸法・スペース）との不適合が主な要因。

- **キャスターと設備の不適合**

特浴ストレッチャーのみを基準に選定したため、居室用移動ストレッチャーの床幅に合わず差し込めなかった。

- **居室内のスペース不足**

居室での動線検討が不足しており、ベッドとタンスの隙間（50cm）に機器を配置できなかった。

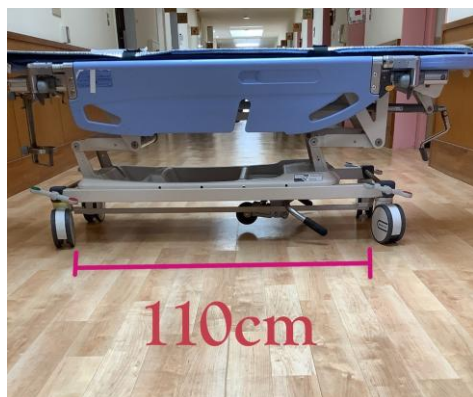
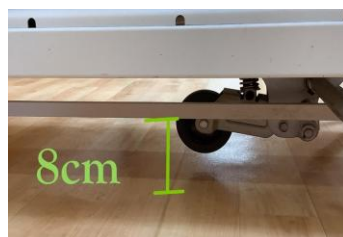
- **移動ストレッチャーとの非適合**

機器の足回りが干渉し、移乗時に利用者をストレッチャーの定位置へ降ろせなかった。

- **特浴室内の空間的制約**

浴室内での取り回しが困難で、導入前より介助時間が延び、新たな業務負担を招く結果となった。

# 手順5 改善活動を振り返ろう (2/2)



## 本格導入見送りの要因分析：人的要因

現場の体制や業務量に起因する組織的なリソース不足が大きな障壁となった。

- **勤務調整の困難（情報格差の発生）**

メーカー説明会に全員で参加できず、操作や活用方法への理解度に個人差が生じた。

- **過度な業務負担（重複する新規プロジェクト）**

通常業務に加え、ICT機器（眠りスキャン）の導入時期と重なったことで、試行準備の同時進行が困難となった。

- **責任所在の不明確化（連携の不足）**

全員が揃う協議の場を持たず、役割分担が曖昧になった結果、メンバー間の連携や責任感の維持が難しくなった。

- **習熟時間の不足と準備の後回し**

多忙により取り組みが後回しになり、操作の習熟や他職員への指導ができないまま返却期限を迎えてしまった。

## 業務改善の土台：タイムスタディの実施目的

「SASUKE」の試行導入と並行し、主観ではなく客観的なデータに基づいた業務改善を進めるために実施。

- 現状の見える化

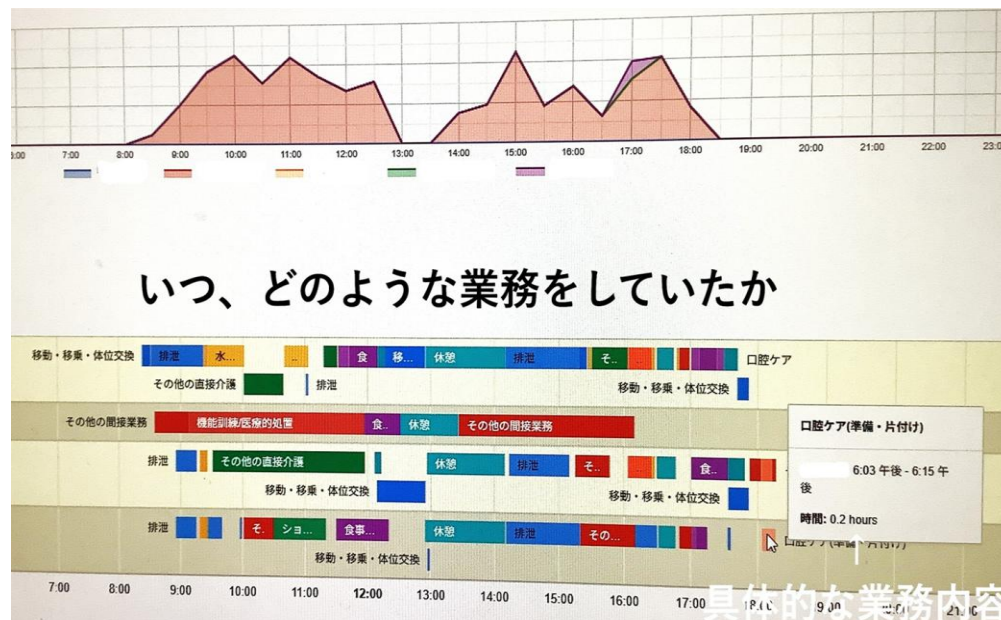
現在の業務内容や時間配分を可視化（見える化）し、現場の実態を正確に把握。

- 改善ポイントの特定

どこに無理や無駄があるのか、改善の糸口を見つけるための基礎資料。

- 職員の意識改革

組織全体で業務効率化を考えるきっかけとなるよう。



現在、得られたデータを分析中。

今後は、分析結果に基づいた業務見直し、改善も併せて取り組んでいく方針である。

## パッケージモデル

P	手順 1	改善活動の 準備をしよう
	手順 2	現場の課題を 見える化しよう
	手順 3	実行計画を 立てよう
D	手順 4	改善活動に 取り組もう
C	手順 5	改善活動を 振り返ろう
A	手順 6	実行計画を 練りなおそう

### 振り返り

機器の性能以上に「導入のプロセス」そのものに重要な学びがあることを実感。

#### ■ 試行導入の結論

- **機器への評価:** SASUKEは職員・利用者の双方に素晴らしいメリットをもたらす機器であると高く評価。
- **適応の判断:** 当施設の物理的・組織的な要因を鑑み、現時点での本格導入は困難。

#### ■ 新たな挑戦：床走行リフトの試行

- **次なる一步:** 職員間の合意の上、年度末に向け「床走行リフト」の試行・計画を再構築。

#### ■ 伴走支援で得た最大の学び

- **計画と準備の徹底:** 機器の選定以上に、事前の綿密な現場シミュレーションが不可欠であることを痛感。
- **チーム連携の深化:** シフト制という制約下で情報をいかに共有し、連携するかという組織運営の重要性を再認識。

### 今後の展望

#### ■ 年度末に向けた実行計画

- 3月2日: 床走行リフト導入・業者説明会（メンバー全員出席）

タイムスタディの分析結果を活用し、全員が参加できる勤務調整を実施。

- 3月2日～10日: リフトの試行的導入・本格導入準備。
- 3月13日～20日: リフトの本格導入運用。
- 3月21日以降: 職員アンケートおよび最終報告書の作成



かご  
＼ロボ／ 2025

導入の成果

## 「伴走支援に応募した理由」

前年度、法人内の小規模事業所で見守り支援ロボットが導入されており、更に生産性向上の為どのように取り組む事が出来るか模索している最中に伴走支援の募集があり応募させて頂きました。

## 「伴走支援を受けて」

業務の効率化だけでなく、職員の負担軽減とケアの質の維持・向上につながりました。今までの固定概念にとらわれず柔軟な働き方や取り組みを考え直す機会となりました。特に移乗支援ロボットの「SASUKE」についてはカクイックス交流センターの展示場で見た事はありませんでしたが、実際に施設に持ち込んで運用し、成果や効果をスタッフ全員で共有出来た事は有意義な事でありました。

## 「今後の重点項目」

- ①標準手順の整備 ②ICT活用の拡大 ③教育資料の整備 ④改善活動の定着

上記の実践により利用者の皆さんに快適な生活を提供すると同時に当法人の中長期目標の達成に向け取り組みを深化させたいと考えています。

当法人の中長期目標「職員、利用者、地域から選ばれる施設」(2024年策定)

かご  
＼ロボ／ 2025